
車輪の唄

江室 美佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車輪の唄

【Nコード】

N3163J

【作者名】

江室 美佳

【あらすじ】

BUMP OF CHICKENの『車輪の唄』の歌詞を、短編小説にしてみました。

※あくまで私個人のイメージです。

PVなどの公式設定とは異なりますが、ご了承ください。

(前書き)

『車輪の唄』

作詞・藤原基央

錆び付いた車輪悲鳴をあげ
僕らの身体を運んで行く
明け方の駅へと

ペダルを漕ぐ僕の背中
寄りかかる君から伝わるもの
確かな温もり

線路沿いの上り坂で
「もうちょっとあと少し」
後ろから楽しそうな声

町はとても静かすぎて
「世界中に二人だけみたいだね」
と小さくこぼした

同時に言葉をなくした
坂を上りきったとき
迎えてくれた朝焼けがあまりに綺麗すぎて

笑っただろう

あの時僕の後ろ側で

振り返ることが出来なかった

僕は泣いてたから

券売機で一番端の

一番高い切符が行く町を僕は良く知らない

その中でも一番安い入場券をすぐに使うのに
大事にしまった

おととい買った大きなかばん

改札に引っ掛けて通れずに

君は僕を見た

目は合わせないで頷いて

頑なに引っかかるかばんの紐を

僕の手が外した

響くベルが最後をつげる

君だけのドアが開く

何万歩より距離のある一步

踏み出して君は言う

「約束だよ

必ずいつの日かまた会おう」

応えられず俯いたまま

僕は手を振ったよ

間違いじゃない

あの時君は・・・君は・・・

線路沿いの下り坂を

風よりも早くとぼしていく

君に追いつけと

錆び付いた車輪悲鳴をあげ

精一杯電車と並ぶけれど

ゆっくり離されてく

泣いてただろう

あの時ドアの向こう側で

顔見なくても分かってたよ

声が震えてたから

約束だよ

必ずいつの日かまた会おう

離れていく君に見えるように

大きく手を振ったよ

町は賑わいだしたけれど

「世界中に一人だけみたいだなあ」と
小さくこぼした

錆び付いた車輪悲鳴をあげ

残された僕を運んでいく

かすかな温もり

歩美が今日、この街を出て行く。

歩美と僕は、この街で一緒に生まれ育ち、幼稚園、小学校、中学校と同じように様々なことを学んだ、幼馴染みだった。高校でようやく別の学校に進学した僕らは、二年前、幼馴染みという関係から恋人になった。

高校の卒業式は、ちょうどこの前済んだ。その後僕の同級生は皆、大学進学や就職など、それぞれの道へと進むための準備をしているところだ。歩美と僕も例外ではない。長かった受験勉強を乗り越えた僕は、近場の二流大学に進学することが決まっている。一方の歩美は、美容師になるという幼い頃からの夢を叶えるため、上京してこの春から、その方面の専門学校に通う。

今日はいよいよ、彼女が都内に引っ越す日だ。

徐々に春らしくなってはきているが、朝の空気はまだ冬の寒さと全く変わらない。夜のうちに冷えきった空気が、痛いくらいだ。

地平線の下に隠れている太陽の光がようやく空をうっすらと照らし始めた頃、僕はマフラーに顔を埋めて、自転車に跨がった。始発の電車で出発する歩美を、駅まで送って行くためだ。

三日前、僕らは恋人ではなくなった。遠距離恋愛にはきっと耐えられないと言う歩美と、よくよく話し合った結果だ。

僕の家から東京に行くには、どんなに急いでも三時間はかかる。常に一番近くにいた僕らが離れることなんて、考えられない。そしてもし離れることになれば、きっと寂しさに押し潰されて、駄目になってしまう。僕らはその結末を安易に想像することが出来たのだ。だから、僕らは別れを選んだ。仕方ないんだと、お互いを納得さ

せながら。

朝の空気が、ハンドルを握る手と風を切る頬を、これでもかという程に冷やしていく。ブレーキを握る度、指先にヒリヒリと痛みを感じる。

歩美は家の前に立って、僕を待っていた。寒さのためだろう、背中を少し丸めて腕を組んで立っている。彼女の足下には、大きな鞆が置かれていた。

あの鞆の中には、何が詰め込まれているのだろう。美容師になるための道をいよいよ歩み始めるといふ期待と、東京で一人で暮らすという不安と。――僕との思い出はあの中に詰め込まれているのだろうか。

鞆の大きさが、いよいよ歩美がこの街を出て行くということを、ありありと物語っている。それを見てようやく、僕は歩美との別れを実感した。

「おはよ」

僕が声をかけると、歩美は普段と変わらない笑顔で答えた。

「おはよ。寒いね」

歩美は小さく震えていた。かじかんだ指先に息を吹きかけているその姿が可愛らしく思えて、とても愛おしい。

大きな鞆を持って、歩美は僕の自転車の後ろに乗った。こうして自転車を二人乗りするのも、最後になるのだろうか。踏み出したペダルがやけに重く感じた。

僕の背中にぴったりとくっつく歩美の温もりが、とても温かい。さつき一人で乗っている時は寒くて仕方なかったが、歩美が乗っているだけでこんなにも違うのか。今までそんなことは思いもしなかったのに。歩美がいることで得られる確かな温もりに、僕は今更氣付いた。

歩美の家から駅までの道には、長く険しい坂道がある。駅は、その坂の頂上にあるのだ。何度も登ったこの坂道だが、今日は何故かいつも以上に険しく感じる。歩美を乗せたまま、無我夢中でペダルを漕ぐ。

「ほらほら、頑張つて。もうちょっと！ほら、あと少しだよ！」

僕の苦労も知らずに後ろに乗る歩美は、楽しそうにはしゃいでいる。いつもの明るい歩美だ。

そう思っていると、ふと歩美が静かになった。僕の耳に聞こえてくるのは、風の音と、鳥のさえずり、自転車が軋む音。微かに歩美の息遣いが聞こえてくる程に、街は静まり返っていた。こんなに静かになることがあるのかと、自分が産まれ育った街の知らない一面を今になって知った。

「何か：すごい静かだね。今世界中にいるのが、私たち二人だけみたい」

何となく憂いのある口調で歩美が言った。本当に二人きりなら、どんなに素敵だろう。そうしたら僕らはきっと、何にも邪魔されることなく、ずっと一緒にいられるのに。

歩美を乗せたまま自転車を漕ぎ、何とか坂を登りきった瞬間、まばゆい光が僕らを包んだ。朝日が上り、街を、いや世界を明るく照らしていた。余りにも美しい朝焼けだった。僕らは、思わず言葉を失った。

「すごい、綺麗」

歩美が、ぽつりと呟いた。心から溢れてきた言葉であることが、声で分かった。

最後に、彼女へこんなに美しい最高のプレゼントが出来て良かった。僕から歩美への、最後のプレゼント。

「ねえ、すごく綺麗だね」

歩美はそう言って、楽しそうにはしゃいでいる。彼女は今、きつと笑っているのだろう。その声を背中で聞いて、僕はやけに切なくなった。楽しそうな歩美とは対照的に、僕の目は涙で一杯になって

いた。歩美に涙を見せるわけにはいかない。僕は振り返ることが出来ず、顎を引いてマフラーに深く顔を埋めた。

駅に着き、僕らはそれぞれに違う切符を買った。歩美は一番高い切符を、僕は一番安い入場券を。歩美が買った切符で行ける街がどんなところなのかを、僕はよく知らない。僕の知らない場所に、歩美は行ってしまう。僕らはこんな風に少しずつ違った選択をして、少しずつ離れていくのか。券売機で買った入場券をすぐに使うのに、僕は大事にしまった。

さっきまではいつもと変わらない様子で明るく振舞っていた歩美も、駅に着いた途端に口数が少なくなった。必然的に、僕らの会話も途切れ途切れになる。

僕の前に行く歩美が、改札を抜けていく。その時、歩美の持つ大きな鞆の紐が引っかかって、歩美は改札の途中で立ち止まった。歩美は困った顔で、僕の方を見た。

今日という旅立ちの日のために一昨日に買ったばかりの鞆。そんな大きな鞆だから引っかかるんだ。むしろこのまま進まなくなっちゃった方がいいじゃないか。

そんなことをふと思ったが、そんなわけにはいかない。歩美と目を合わせることが出来ないまま、僕は静かに頷いた。そして、頑なに引っかかっている鞆の紐を、僕の手が外した。

ホームに人はほとんどいなかった。始発の電車が来るまで、あと五分。あと五分で、歩美はこの街から出て行ってしまう。

僕らは並んでホームに立ち、電車が来るのを待った。冷えた手を温め合いながら。僕が歩美の手に触れると、歩美は僕の手を握り返してくれた。自転車のハンドルを握っていたことで芯まで冷え切っていた僕の手が、少しずつ温まっていく。

電車の到着を知らせるベルが、ホームに鳴り響いた。その瞬間、歩美の手に力がこもった。僕も、一層強く歩美の手を握り返す。

もう、これで最後だ。名残惜しくて仕方ない。それでも、別れは容赦なく僕らに迫り来ている。

隣にいる歩美が、僕を見た。その目には、寂しそうな色がはつきりと窺える。僕の中にあるわがままな感情が、外に出ようとしている。しかし、僕は何としてもそれを抑えなければならない。歩美のために。

「電車。来るぞ」

僕がそう言うと、歩美は小さく頷き、足元に置いていた鞆を持ち上げた。余程、鞆が重いのだろう。一步前に進んだ時、バランスを崩して少しふらついた。一瞬、ひやりとしたが心配は要らなかった。歩美は力強く進み続けた。その後ろ姿に、夢に向かう歩美の意志のようなものを、僕は感じずにはいられなかった。

ホームに電車が到着し、電車の扉が開く。この扉が、歩美のために開かれたもののように思える。僕なんかは一切寄せ付けない、不思議な雰囲気放っていた。

歩美はすぐに乗り込もうとはせず、一息置いてから電車に乗った。歩美が踏み出したこの一步が、彼女の夢への最初の一步だ。そして、僕と歩美を別つ、大きな大きな、何万歩よりも距離のある一步になる。

電車に乗った歩美と、ホームに立つ僕が対峙する。発車を告げるベルが鳴る。僕はもう、歩美を見ることが出来なかった。俯く僕の耳に、歩美の明るい声が届く。

「約束だよ」

そう言って、歩美は深く息を吸ってから続けた。

「いつか、絶対に、また会おうね」

それが、僕に対する歩美の最後の言葉だった。次の瞬間、電車の扉が僕と歩美を隔てた。僕は歩美の言葉に答えられずに俯いたまま、小さく手を振った。

電車が走り出すと同時に、僕は駆け出した。
間違いない。彼女は、きっと。

改札を抜けて、駅のすぐ前に停めていた自転車の急いで跨る。線路沿いの下り坂を風よりも速く下っていく。朝の冷たい空気も、今は気にならない。歩美に少しでも近付けるように、夢に向かっていく歩美に追い付けるように。錆び付いた自転車の車輪が悲鳴を上げる。ほんの一瞬、何とか電車と並びはしたが、ゆっくりと離されていく。

歩美は泣いていたのだろう。あの時、僕に最後の言葉を告げる時、扉の向こう側で。顔を見なくても僕には分かった。歩美の声が、震えていたから。

僕は思わず、電車に向かって叫んでいた。歩美に言うことの出来なかった返事を伝えるために。

「約束だぞ！いつか絶対、また会おうな」

電車が見えなくなるまで、僕は大きく手を振りながら何度も叫んだ。離れていく歩美に、僕の姿が見えるように。僕の思いが伝わるように。

朝日が昇り、街はようやく賑わいだした。見慣れた街並はいつもと変わらないはずなのに、何処か違っていている気がする。

「世界中に一人だけみたいだな」

僕はぽつりとそう呟いた。

ペダルを踏み込むたびに、自転車が軋む。まるで僕を慰めようとしている優しい歌声のような、心地よい音色に思えた。

一人になった僕を、自転車が運んでいく。背中に、歩美の温もりが微かに残っているような気がした。

(後書き)

BUMP OF CHICKENの『車輪の唄』。
言わずと知れた名曲ですが、私も大好きです。

こうして一つの曲を物語に変換してみたわけですが、音楽にも一つ一つの物語があるんだなあと思いました。

絵画も、音楽も、文学も、芸術というのは人の心の中を映し出すスクリーンのようなもので。

必ず人の心が描かれているんですよね。
それを汲み取ることによってようやく、本当の芸術が完成するのではないかなあと。

はっ！

ただの独り言でございます。

申し訳ありません^^；

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。
感想等、是非お聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3163j/>

車輪の唄

2010年10月8日15時24分発行